

追加報告

平成 21 年度 取組方針に対する結果について

(注) 「平成 21 年度取組方針に対する結果について」は、平成 22 年度第 2 回静岡県立美術館第三者評価委員会（平成 23 年 2 月 10 日開催）の際に委員の指摘を受け、自己評価報告書の追加報告として作成された。

平成 21 年度取組方針に対する結果

1 収蔵品展の充実

開館以来収集に努めてきた狩野派コレクションに新出作品を加えて、一堂に展示する「狩野派の世界 2009」展を開催し、狩野派の先祖が伊豆地方出身であること、狩野派が駿府の絵画制作を担当していたことなどを紹介したことで、本県に優れた芸術的土壌が存在することを改めて示すことができた。同展は、12,809 人(見込:15,000 人)の観覧者にご覧いただいた。

また年間を通じた収蔵品展【別表 1】においても、担当学芸員が様々な工夫をこらしたことで、18,042 人(見込:15,000 人)に観覧いただき、多くの来館者にコレクションの鑑賞機会を提供することができた。

【別表 1 平成 21 年度 収蔵品展】

展覧会名	期 間	展示する収蔵作品など
新収蔵品展	3/31～5/15	狩野探信守道《井手玉川・大堰川図屏風》ほか
石田徹也展と静岡県ゆかりの画家	3/31～5/17	
体で感じるアート	5/26～7/5	草間彌生《水上の蛍》ほか
クレーの時代の日本洋画	7/7～9/6	長谷川潔《南仏風景》ほか
ランドスケープ・ペインティング [西洋編]	9/8～11/8	クロード・ロラン《笛を吹く人物のいる牧歌的風景》ほか

2 展覧会企画と戦略的広報

当館の自主企画展としては、「静岡の美術IX 柳澤紀子展」を開催した。柳澤紀子の全貌を紹介した全国初の本格的展覧会とすることができた。またロダン館での展示を試み、ロダン作品とのコラボレーションを行うなど当館ならではの工夫も行った。

年間の展覧会全体を通じての「作品やテーマに興味を持った人の割合」は、80.9%と高く、また「展覧会における新規来館者の割合」は、21.4%と目標(20.0%)を達成した。

戦略的広報については、展覧会ごとに学芸課・総務課によりチームを作り、マーケティングによる戦略的広報に努めたが、静岡県立美術館を全国的に PR する方策を講じるには至らなかった。

【別表 2 平成 21 年度 展覧会】

展 覧 会 名		期 間
企 画 展	よみがえる黄金文明展	4/11～ 5/15 (31 日間)
	静岡の美術IX 柳澤紀子展	5/26～ 7/5 (36 日間)
	バウル・クレーー—東洋への夢展	7/14～8/30 (42 日間)
	特集 狩野派の世界展	9/10～10/18 (35 日間)
第 24 回国民文化祭 美術展 (洋画・彫刻・造形)		10/24～11/8 (14 日間)
収蔵品展		年 間
静岡県立美術館・浜松市美術館合同企画展		4/18～5/17
移動美術展(佐野美)		1/5～2/14

3 ボランティアの組織改革への取組

開館以来、活動を継続してきたボランティア活動であるが、近年、活動がやや停滞し、またボランティアのモチベーションも下がりつつあった。平成 18 年度以降グループ活動強化などのボランティア改革を行ってきたが、本年はその集大成として、工事休館期間を利用した抜本的な組織改革と再募集を行った。

再募集にあたって、ボランティアの活動方針を<来館者サービスの充実、美術館運営支援、地域連携の推進>と定め、これに沿って6つのグループ活動を設定した。また、新たに任期制(3年間)を導入して活動の活性化を促す仕組みを取り入れるとともに、活動頻度を従来よりも高く設定することで、美術館活動への理解を深め、かつ経験の蓄積を効率的にし、活動の質の向上を図ることとした。

面接選考と研修を経て118名が新ボランティアとして登録し、平成22年4月から活動を始める。

来館者に対するサービスの向上等、評価指標への反映については、今後その結果を分析する必要がある。

<ボランティア活動人数の推移>

昭和 61 年度	— 350 名	平成元年度	— 317 名	平成 18 年度	— 278 名
平成 19 年度	— 241 名	平成 20 年度	— 227 名	平成 21 年度	— 211 名
平成 22 年度	— 118 名				